中島敦「狐憑」論
――「木乃伊」との関係から――

杉岡歩美

はじめに

中島敦「狐憑」は、第一創作集『光と風と夢』（昭17・7）に《古譚》の総題の下、採録された作品である。《古譚》は「狐憑」「木乃伊」「山月記」「文字禍」四篇から構成されている。佐々木充が「一つの特徴として、この四篇が、つねに〈文字・言葉〉をめぐって展開することを知ることができる。[1]」と指摘して以来、《古譚》は「〈文字・言葉〉」を中心に読解されてきた。「狐憑」に関して佐々木は、「「狐憑」はいわば人類最初の〈詩人〉の誕生と死の物語であって、そこでは、日常的実用に発した言語が、遂に詩的世界の創造に参画する、その記念すべき瞬間が捉えられている[2]」とし、〈言葉〉を生み出す「〈詩人〉の誕生」を「狐憑」の主題とした。以後それを受ける形でさまざまな読解が試みられ、同時代戦時下の言論統制に関する批判を読み取る論も多く出た[3]。それらの論はおおよそ妥当と考えられるが、それらに収斂させるのではなく、本稿では、なぜ「狐憑」なのか、その根本的な疑問から考察を加えていきたい。

また、この四篇にはその掲載順を記したとおぼしき「ノート第三」があり、それによると当初は「つきもの」「木乃伊」「文字禍」「人虎伝」だったらしい。「つきもの」は「狐憑」、「人虎伝」は「山月記」を指すと推測できる。「つきもの」であった作品が「狐憑」に変わったのはなぜか、「狐憑」という語句の分析を通し、考察を深める。なお、《古譚》のうち、「山月記」「文字禍」は「文学界」（昭17・2）に発表されている。四作品のうち二作品が選出されたのは偶然だが、「狐憑」「木乃伊」二作品が選出されなかったことも偶発的な必然だといえないだろうか。「狐憑」と「木乃伊」はともにヘロドトス『歴史』を素材としている。だが、二者を結びつけて

語られることはなかった。従って、本稿では「狐憑」「木乃伊」を対となる二作品として位置付けてみたい。

一

「狐憑」「木乃伊」二作品の共通項として、前述したように両者ともにヘロドトスの『歴史』に取材していることが挙げられる。ただし、宮田一生が「『歴史』に記述された事項を恣意的に断片的に切り取り、繋ぎ合わせ」たもので、「いわば古代の再現のための佳景であって、とりたてて注意する必要はない」と指摘するよう[4]に、『歴史』に取材したとて、『李陵』など他の作品と違い忠実に作品に援用したのではない。

ヘロドトス『歴史』は「散文作品としては世界最古にして最長」であり、「最大の武器は旅と聞き取り調査」、「『歴史』に書きこまれた話の中には、今日の用語で言えば昔話や伝説とすべきものが多い」[5]とされる。大正時代には既に「ヘロドトスは史料を蒐集し之を巧みに叙述するの技倆は之を具へたるも相矛盾せる言ひ伝へに就て之が取捨選択を試むるの批評眼は之を欠けり。要するにヘロドトスの真価は科学的なるの点に在らずして文学的なるの点にあつて存すと云ふ可く[6]」と評されている。

つまり、口承の「歴史」の「聞き取り」を行ったヘロドトスの『歴史』は、「昔話」や「伝説」を採録した「文学的」「物語風の歴史[7]」と評価され、史実的価値よりもその虚構性が価値付けられているのである。中島が「恣意的に断片的に切り取」ったのは、そうした『歴史』の側面に対応しているのではないか。たとえば、《古譚》の「文字禍」において「書かれなかつた事は、無かつた事じや。（略）歴史とはな、この粘土板のことじや。」と老博士が口にするように、「文字」には永続性があり、書かれた瞬間その言葉は力を持つが、同時に「書かれなかつた事」はその瞬間消え去ることになる。

『歴史』に取材しつつ、「断片的に切り取」ることで、〈文字〉のない社会の出来事を〈文字〉で書く時点で、書き手による恣意性が生じることを示したかったのだろう。「狐憑」も「木乃伊」もともに明らかな形で〈近代〉的な語り手が登場するのもその意図を補強できよう。たとえば「狐憑」は次のように描かれる。

> ネウリ部落のシャクに憑きものがしたといふ評判である。色々なものが此の男にのり移るのださうだ。鷹だの狼だのの霊が哀れなシャクにのり移つて、不思議な言葉を吐かせるといふことである。（以下、引用部分の傍線は引用者が行う）

「狐憑」は冒頭から「評判である」「さうだ」「といふことである」と伝聞形式を多用する。そして、後にある「但し、斯うして次から次へと故知らず生み出されて来る言葉共を後々迄も伝へるべき文字

といふ道具があつてもいい筈だといふことに、彼は未だ思ひ到らない。今、自分の演じてゐる役割が、後世どんな名前で呼ばれるかといふことも、勿論知る筈がない。」との文章によって、〈近代〉認識を持つ語り手がこの物語を語っていることが諒解される。

〈近代〉的な語り手は伝聞形式でしか語り得ないのであり、その真偽は〈文字〉にされたものからはわかり得ないのである。「山月記」と「文字禍」が〈文字〉に関連して肉体的／精神的死を遂げる二作品だとすれば、「狐憑」と「木乃伊」は〈書かれなかった歴史〉に関連して肉体的／精神的死を迎える二作品だといえよう。

さて、「狐憑」「木乃伊」二作品を結びつけるのは『歴史』の存在だけではない。「狐憑」の題名である「狐憑き」（杉岡注：以下、中島敦の作品を「狐憑」、概念上の現象を引用箇所以外では「狐憑き」と書き分ける。）にまつわる言説が関わってくる。

新井通郎は、中島が日常的に用いていた辞書、『辞林』と『大日本国語辞典』を参考に、「つきもの」と「狐憑」の語句の違いを、「一般認識として、「つきもの」は、人に憑く霊を指し、「きつねつき」は、憑かれた者を指すといえる。「狐憑」にこの意味概念を戻したとき、「つきもの」はシャクに憑く種々雑多なものになり、「きつねつき」は憑かれた人物、つまりシャクを示すことになろう」[8]と述べる。

「狐憑」への変更が、「シャクを示すこと」になるのは間違いないだが、「つきもの」と「狐憑」は、「憑く霊」と「憑かれた人物」との違いだけなのだろうか。たしかに、「ノート第三」に「〇つきもの」とあったように原題である「つきもの」から「狐憑」への変更は意図的になされたと判断出来る。付け加えるならその変更には、「狐憑き」という概念が必要だったのではないだろうか。

そもそも作品「狐憑」には「狐」は登場しない。「シャク」は「此の部落の下の湖を泳ぎ廻る鯉」「トオラス山の隼」「草原の牝狼」など多くの動物の言葉を語る。逆に言えば「狐」に憑かれる描写はないのである。

では、なぜ「狐憑」なのか。「明治6年には、従来民間療法の役割を果たしていた「憑祈祷」や「狐下げ」を禁止する法令が出され[9]」るなど、「これまでの感覚・知覚、そして認識の仕方を批判するうえで、格好のターゲットとして槍玉にあげられたのは、狐憑き[10]」との川村邦光の指摘があるように、「狐憑き」は〈近代〉に入り、盲信だと西洋科学・医学から否定された存在である。

「狐憑き」に関しては、すでに石井要が「悲劇の主人公＝人間という解釈枠から外れてしまう存在―動物―がどのように語られ、小説をどのように特徴づけているか」と問題提起し、概要をまとめている[11]。石井は「明治期に西洋の精神生理学、脳医学が導入されて以

来、狐憑は、狐をはじめとした動物の霊に憑かれる超自然的な現象だけでなく、精神に異常をきたす現象、またはその異常者自身を指す言葉として、一般に流布していた」と指摘し、「小説「狐憑」の背景には、動物霊魂の憑依、狐憑を、身体・精神の「故障」や、共同体の「未開」・「児童的」な特徴へと回収しようとする動きと、それらの現象の実在を生物学的に認めていこうとする動きに引き裂かれた言説空間があった」とまとめている。ただし「当時圧倒的に受け入れられていたのは、進化論に基づく人間優位な生物観」との注釈もあるように、「共同体の「未開」・「児童的」な特徴へと回収しようとする動き」が多く働く場であったことは間違いないであろう。

「身体・精神の「故障」」とは、〈近代〉以後もたらされた概念であり、「西洋の精神生物学、脳医学」が導入されて以降、「狐憑き」は〈未開〉社会特有の症状として認識、把握されていくこととなる。たとえば、昼田源四郎は「病気や狂気の原因を、邪悪な霊魂が祟りをしたり憑依したために生じたと考える病理観は、古代医学やいわゆる未開民族の病理観として、かなり普遍的にみられるもの」であり、「病気や疾病をひきおこす何者かの邪悪な意志」を感じた人々は「悪霊は個人や共同体の外部から到来したものだという外因論的な信念」を持っていたとする⑫。

「狐憑」冒頭には、「後に希臘人がスキュティア人と呼んだ未開の人種の中でも、この種族は特に一風変つてゐる。」「ネウリ部落のシャクは、斯うした湖上民の最も平凡な一人であつた。」とあり、「シャク」が〈未開〉社会のなかの「最も平凡な一人」だからこそ、〈未開〉表象が補強されるよう「狐憑」というタイトルは付けられたと考えられる。ただ、ここでなにより着目したいのは、「狐憑き」が、「これまでの感覚・知覚、そして認識の仕方を批判するうえで、格好のターゲットとして槍玉にあげられ」、「精神に異常をきたす現象、またはその異常者自身を指す言葉として、一般に流布していた」事実である。この点に関しては後述したい。

二

さて、「共同体の外部から到来したもの」としての「憑きもの」概念は作品にどう生かされたのか。「狐憑」本文に戻ろう。「狐憑」の「憑きもの」は次のように描かれる。

「弟のデックが死んで」「間もなくシャクは妙な譫言をいふやうに」なる。「蛮人に斬取られた彼の弟デックの右手がしやべつてゐるのに違ひないといふ結論に達」し、「四五日すると、シャクは又別の霊の言葉を語り出」し、「密かにデックの魂が兄の中に忍び入つたのだと人々は考へ」る。

「未開の人種」の共同体のなかでは、当然ながら「シャク」は、

「弟デックの右手」「デック其の人」「シャクと関係のない動物や人間共」（「共同体の外部」）に「憑」かれたと考えられる。「彼の弟デックの右手」と「デック其の人」とは「別の霊」であり、「彼の最も親しい肉親、及び其の右手」と記載される。ここでは、「狐憑」の「ネウリ部族」という共同体において、「デック」と「右手」は別物であり、一つの統一した主体としては想定されていない様が描かれる。

この「右手」に関しては、大原祐治が「文字を書く部位に他ならない「手」に関する象徴的な描写」と論じている。[13] 重要な指摘であり、中島敦が「シャク」が語り始めた最初の部位を「右手」にしたことの意味の一つではあろうが、「文字を持たないネウリ部族の人々が、わざわざ「右手がしやべ」るのだと表現することの裏には、「右手」とは表現する部位なのだということそれ自体を彼らが十分に認識しているのだ、ということが透けて見える。」と続く、この点に関しては些か疑問を感じる。「右手」であるのが「シャク」が〈書く〉ことから疎外された存在であることを暗示しているのは間違いない。ただ、物語内部において〈未開〉社会の人々が認識していたとはいえないだろう。なぜ「右手」なのか。本文を見ていこう。

血に染んだ湖畔の土の上に、頭と右手との無い屍体ばかりが幾つか残されてゐた。頭と右手だけは、侵略者が斬取つて持つて帰つて了つた。頭蓋骨は、その外側を鍍金して髑髏杯を作るため、右手は、爪をつけたまま皮を剥いで手袋とするためである。

「弟デックの右手」は、「手袋」にされている。「右手」が「手袋」にされる描写は中島がヘロドトスの『歴史』から変更を加えた箇所である。「死体の右腕」を「矢筒の被り」にするという『歴史』での記載が、「弟デックの右手」が「侵略者」の「手袋」になったとの描写に変えてられている。中島が採用した箇所ではないが、『歴史』にも「レオデュキデス」が「手袋」を用いたとの文章があり、「手袋」は古代から存在していることがわかっている。「手袋」とは自分や他人の手を覆うものである。「侵略者」に「斬取」られた「弟デックの右手」は、「侵略者」＝〈他者〉を纏う存在と捉えることが出来る。

また、「頭」ではなく「右手」が語るのは、「右手」の「象徴的な描写」よりも、そもそもなぜ「頭」ではないのか、との問いの方が重要である。つまり、「頭」には「脳」があり、そこで思考すると認識している〈近代〉的視点を相対化するためだと考えられる。「頭蓋骨」は「鍍金」され、〈外部〉を覆われる、対して、「右手」は「手袋」となって〈外部〉にある。「手袋」は「手」を覆いはするものの着脱可能である。取り外しのきく〈外部〉にある、これが

「右手」であった理由であろう。追加するならば「現代の英語のsinister（不吉）は古代の羅馬人としては左利を意味する言葉であつた」[14]との文章も大正時代に見受けられ、〈古代〉社会が「左手」を忌むとされたことからかもしれない。

いずれにせよ「シャク」に憑いた「憑きもの」が「手袋」にされた「手」であるのは、〈外部〉性を強く印象づけるためではないか。

前述したが、「狐憑き」は「外部から到来したもの」である。〈外部〉に関する考察として、示唆に富んだ言説がある。[15]

憑依する狐は可視の実体であることもあれば、不可視のものでもあったが、観念的に実体化された〈モノ〉だった。そして、この〈モノ〉は、人間の心身の働きを混乱・中断させることはあっても、破壊するものとは考えられてこなかった。心身内に侵入することもあれば、また追い払うこともできる。超自然の外在的な〈モノ〉とみなされていたのである。それゆえに、狐（狐の霊）に憑依された者はそれを心身内から排除することによって、狐憑きの状態から常態へと復帰することが可能だった。決して狐憑きは不可逆の治療不能な事態とはみなされず、世俗的な道徳によって非難されることはなかった。

【図1】

「狐憑き」は、「外在的な〈モノ〉」であり、「心身内から排除」でき、「常態へと復帰することが可能」だという。つまり、「狐憑き」は、「憑かれた」ものの〈外部〉に存在し、いずれ「常態」に戻ると想定されていたのである。伊藤慎吾が「狐憑きと脳病」のなかで、掲載した挿絵（【図1】）はそのことをわかりやすく示している。「四国霊場の一つ阿波の真言宗立江寺では大正二年（一九一三）に『延命地蔵大菩薩霊験記』と題する二四頁から成る小冊子を刊行した。」「挿絵をここに載せたが、この絵では狐は首元から外に出てきている様子が描かれている。近世の絵画には夢や魂を同じく頭ではなく胸元ないし首元から描くものが多く、それに倣ったものではないかと思われる[16]」とある。「狐」たちは「頭ではなく胸元ないし首元」から「外に出」ており、「外在的な〈モノ〉」であったことが明示される。

このように「心身内から排除」できるはずの「狐憑き」は、しかしながら、作品「狐憑」には描かれない。「憑きものは落ちた」「シャク」は、「祖先伝来のしきたりに従つて処分される」のである。

なぜ〈外部〉にあり、「常態」に復帰できるはずの「未開の人種」のなかの「最も平凡な一人」であった「シャク」は「処分」されたのか。

三

「シャクが変になり始めたのは」と、物語冒頭から「シャク」は「変」だと位置づけられる。異質な存在としての「シャク」は、次第に「憑きもの」の所為だとされていく。

その後間もなくシャクは妙な譫言をいふやうになつた。何が此の男にのり移つて奇怪な言葉を吐かせるのか、初め近所の人々には判らなかつた。言葉づきから判断すれば、それは生きながら皮を剥がれた野獣の霊ででもあるやうに思はれる。一同が考へた末、それは、蛮人に斬取られた彼の弟デックの右手がしやべつてゐるのに違ひないといふ結論に達した。四五日すると、シャクは又別の霊の言葉を語り出した。今度は、それが何の霊であるか、直ぐに判つた。武運拙く戦場に斃れた顛末から、死後、虚空の大霊に頸筋を掴まれ無限の闇黒の彼方へ投げやられる次第を哀しげに語るのは、明らかに弟デック其の人と、誰もが合点した。シャクが弟の屍体の傍に茫然と立つてゐた時、密かにデックの魂が兄の中に忍び入つたのだと人々は考へた。

さて、それ迄は、彼の最も親しい肉親、及び其の右手のことと、彼にのり移るのも不思議はなかつたが、其の後一時平静に復つたシャクが再び譫言を吐き始めた時、人々は驚いた。今度は凡そシャクと関係のない動物や人間共の言葉だつたからである。今迄にも憑きもののした男や女はあつたが、斯んなに種々雑多なものが一人の人間にのり移つた例しはない。

「憑きもの」だと「人々」が判断を下すのは、「シャク」の「妙な譫言」の理由が「判らなかつた」からである。高橋紳吾は、「狐憑き」はなぜ「狐だったのか」という問いに、「キツネツキのキツネは、象徴としての「怖い、危険な、特殊な能力をもった」他者の記号で、ヒトの感情を可視的なものに変換したものだ。」「「××にはキツネが憑いている」という場合、それが病気や不幸の社会的説明体系として機能する。つまりある不運な出来事に名を与えることによってそれを可視化し、コントロールすることができるようになるからである。」と述べている。[17]

「狐憑き」は主に〈未開〉社会のなかで異常が起きたとき、「怖い、危険な、特殊な能力をもった」他者を、「コントロール」可能な存在として変換するシステムであるといえよう。

「シャク」の「奇妙な」状態に「憑きもの」だと「名を与え」「可視化」することで「コントロール」下に置こうとする人々の動態が、

「狐憑」でも看取される。これも、「狐憑」が、「狐憑」と名付けられた理由であろう。人々が「シャク」を「狐憑き」と名付け、その存在を諒解しようとしたのである。

また、波線部で引いた箇所はすべて「人々」の思惑が「シャク」を形づくっていくところである。「妙な譫言」を言う「シャク」を、「近所の人々」は、「判断」し、「考へ」「結論に達し」「判」っていく。こうした「人々」の存在をキーワードとした読解は多く行われてきた。たとえば、諸岡知徳が「シャクが語り手になる過程が「人々」の判断や結論など、「人々」の視点から説明されているのである。そうした「人々」の視点は「狐憑」全編に貫かれているといえる。」と指摘するように[18]、「憑きもの」だと判断するのも、「憑きものが落ちた」と認識するのもすべて「人々」である。

憑きものは落ちたが、以前の勤勉の習慣は戻つて来なかつた。働きもせず、さりとて、物語をするでもなく、シャクは毎日ぼんやり湖を眺めて暮らした。其の様子を見る度に、以前の物語の聴手達は、この莫迦面の怠け者に、貴い自分達の冬籠りの食物を頒けてやつたことを腹立たしく思出した。

この箇所について、新井通郎は「周囲の人物を題材にするようになった時、シャクの譫言が限界に達していたと述べた。シャクは空白の時間において、限界を超えた崩壊を迎えたのである。憑きものがついていないにも拘わらず、憑きもののせいにされてきたシャクである。そのシャクの姿が、まさに呆けたような神経病の姿、「きつねつき」の状態にあるといえるのではないか。譫言をいう者のみが「きつねつき」ではない。冬籠りから明けた後のシャクの姿も神経病患者の姿、「きつねつき」の姿なのである。」とする[19]。

果たして、「神経病患者の姿」がここでは描かれているのだろうか。語り手が〈近代〉視点とはいえ、あくまでも物語は〈未開〉を舞台にしている。事実「憑きものが落ちた」「シャク」は、「部落にとつて有害無用と一同から認められた者は、協議の上で之を処分することが出来る」という「祖先伝来のしきたりに従つて処分される」のである。

したがってここでは「神経病患者の姿」ではなく、「憑きものが落ちた」にも関わらず「常態に復帰」し得ない姿を捉えるべきであろう。そして着目すべきは、「憑きものが落ちた」と判断するのもまた「人々」ということである。

「人々は、彼が最早物語をしなくなつたのに気が付いた」「言葉つきもすつかり生彩を失つて了つた。人々は言つた。シャクの憑きものが落ちたと」との文章からは、「物語」はしなくなったが、「生彩を失」いつつも「言葉」を話していることがわかる。そもそも物語の冒頭で「シャク」は「物語」ではなく「妙な譫言」「奇妙な言葉」

を吐いていたのである。

人々は珍しがつてシャクの譫言を聞きに来た。をかしいのは、シャクの方でも（或ひは、シャクに宿る霊共の方でも）多くの聞き手を期待するやうになつたこと）である。

「人々」が「珍しがつて」「譫言を聞きに来た」結果、「シャクの方でも（或ひは、シャクに宿る霊共の方でも）多くの聞き手を期待するやうになつた」との描写からは、「譫言」に興味を持った「人々」のために、「シャク」が語り始める構造が見て取れる。

「言葉つき」が「生彩を失」ったと感じるのは「人々」であり、「妙な譫言」「奇妙な言葉」を「珍し」く思い聞きに行くのも「人々」なのである。「働かない」ようになった事実はあれど、「話の蒸し返し」であれ、こと「譫言」に関しては然程変化はなかったと捉えられないだろうか。そうだとすれば、ここからは「人々の判断」が全てを決定づけていく姿が浮かび上がる。「譫言」を言う「シャク」は変わらずそこに存在するのだが、「譫言」の中身を「物語」として意味付けた「人々」は、「譫言」の「物語」としての価値の消失とともに「シャク」の存在価値も見失う。こうした共同体の利己的な姿が描かれているといえよう。共同体は異質な存在を「憑きもの」という枠に入れ込み、そこから洩れたものはまた別の枠に押し込み、排除していく。しかも「奸譎な老人は、占卜者を牛角杯二箇で以て買收し、不吉なシャクの存在と、最近の頻繁な雷鳴とを結び付けることに成功した」と描かれるように、公的なルール（枠）ではなく、あくまでも私的なルールでの排除であることが強調されているのである。

異質な存在を〈前近代〉的社会の「人々」がどのように排除していくかが描かれた作品が「狐憑」だといえよう。

四

次に、「狐憑き」が〈近代〉に入り変容していった事実から、「木乃伊」作品との関連を指摘したい。そこで、〈近代〉に於ける「狐憑き」にまつわる言説を整理していこう。

たとえば、一八七五年に刊行された増山守正『旧習一新』の「憑狐」と題された頁には「世に伝ふ狐の性人魂を惑すと検し出す神経脳の病の原開化仁恩遍く物に及ぶ野干当に雪ぐべし罪名の冤（杉岡：書き下し文に直した）[20]」（【図2】）とあり、「狐憑」がすでに「神経」「脳の病」へと転化した様が見受けられる。

このように、「狐憑」は明治に入り、「脳・神経の作用」とされ、「旧習」として批判されるべき対象へと変化したことが見て取れる。

明治に入り起こった急激な認識の変化について、川村邦光は、次のように指摘する。[21]

狐憑きは脳の障害・故障による妄想とされ、狐という霊・生き物は姿を消さざるをえなくなる。神経や脳の病気として、狐憑きは身体の内部に閉じ込められたのである。（略）狐は人間の身体内から出入り可能だった。治療可能だったのである。それが治療不能へ逆転する。神経・脳の病気として、パースペクティヴの転換が一般化・通俗化していくことになる。

「狐憑き」は近代に入り「迷信」だと断罪され、「脳病」「神経病」の枠に落とし込まれる。前々章で見たように、「狐憑き」は「外在的な〈モノ〉」によってなされるものであり、共同体においては排除されることはなかったが、「神経や脳の病気」と名付けられることで、原因は個人へと還元され、「治療不能」へと陥っていく。

また、「憑依」についても、重要な指摘がある。[22]

【図2】

憑依という自体を非歴史的に現象的な側面から叙述してみよう。それは、生活世界の日常的な意識や心身の状態や行動スタイルが何らかの要因や作用、影響によって変化した、あるいは逸脱したとみなされる状態（変性意識状態）を想定することができる。この逸脱を生じさせた要因や作用、影響が生活世界の外部に存在するとされる場合に、憑依とみなされよう。他方、内部に存在するとされる場合は、気違い、狂気、精神異常などと名指しされ、異なった解釈や処置法がおこなわれることにあろう。

「逸脱したとみなされる状態」が〈外部〉に存在するとき「憑依」とされ、〈内部〉に存在するとき「精神異常」とされる。この「憑依」と「精神異常」との関係は、「狐憑」と「木乃伊」との関係にも見いだせる。「狐憑」の「シャク」が語る「譫言」は、「右手」や「狼」などの「憑きもの」といった〈外部〉にあったのに対し、「木乃伊」の「パリスカス」の「譫言」は、「瘋癲病者の発作」や「明らかな狂気の兆候を見せ」たとされる。つまり、「木乃伊」において「逸脱したとみなされる状態」は、「神経や脳の病気として」〈内部〉に閉じ込められた状態で描写されるのである。

そこで、「狐憑」と「木乃伊」を並べ比べると、同じような語句が複数存在することがわかる。「狐憑」と「木乃伊」の対照表を次

【表1】「狐憑」「木乃伊」対照表（傍線引用者）

	「狐憑」	「木乃伊」
平凡	・ネウリ部落のシャクは、斯うした湖上民の最も平凡な一人であつた。 ・生来凡庸なあのシャク	・見飽きる程見て来た平凡な木乃伊である。
譫言	・その後間もなくシャクは妙な譫言をいふやうになつた。何が此の男にのり移つて奇怪な言葉を吐かせるのか、初め近所の人々には判らなかつた。言葉つきから判断すれば、それは生きながら皮を剥がれた野獣の霊ででもあるやうに思はれる。 ・人々は珍しがつてシャクの譫言を聞きに来た。	・翌日、他の部隊の波斯兵がパリスカスを発見した時、彼は固く木乃伊を抱いたまま、古墳の地下室に倒れてゐた。介抱されて漸く息をふき返しはしたが、最早、明らかな狂気の徴候を見せて、あらぬ譫言をしやべり出した。
空想 夢想	・之が元来空想的な傾向を有つシャクに、自己の想像を以て自分以外のものに乗り移ることの面白さを教へた。 ・空想物語の構成は日を逐うて巧みになる。想像による情景描写は益々生彩を加へて来る。自分でも意外な位、色々な場面が鮮かに且つ微細に、想像の中に浮び上つて来るのである。	・何處か夢想的な所があり、その為、相当な位置にゐたにも拘はらず、何時も人々の嘲笑を買つてゐた。 ・とにかく、何時もの夢想から醒めて、ひよいと気が付いて見たら、たつた一人で古い墓室の薄暗がりの中にゐた、といふより外はない。
異常	・今迄にも憑きものした男や女はあつたが、斯んなに種々雑多なものが一人の人間にのり移つた例しはない。 ・人々は言つた。シャクの憑きものが落ちたと。多くの物語をシャクに語らせた憑きものが、最早、明らかに落ちたのである。	・敗れた埃及軍を追うて、古の白壁の都メムフィスに入城した時、パリスカスの沈鬱な興奮は更に著しくなつた。癲癇病者の発作直前の様子を思はせることも屢〻である。以前は嗤つてゐた朋輩達も少々気味が悪くなつて来た。 ・翌日、他の部隊の波斯兵がパリスカスを発見した時、彼は固く木乃伊を抱いたまま、古墳の地下室に倒れてゐた。介抱されて漸く息をふき返しはしたが、最早、明らかな狂気の徴候を見せて、あらぬ譫言をしやべり出した。その言葉も、波斯語ではなくて、みんな埃及語だつたといふことである。

に示すこととする（【表1】）。

「平凡」な「シャク」が「妙な譫言」を言い始めたとき、「元来空想的な傾向を持つ」彼には「憑きもの」が憑いたと「人々」に言われる。一方で「木乃伊」の「パリスカス」は「夢想的な所」があり、「譫言」をしゃべり出し、「瘋癲病者」「狂気の兆候」と「人々」に思われる。つまり、「譫言」「空想」／「夢想」といったキーワードを同じくする存在が、それぞれの作品内の「人々」に、片方は「憑きもの」とされ、もう片方は「病気」とされるのである。

「狐憑き」という現象が、〈前近代〉には「外部から来るもの」「憑きもの」として捉えられ、〈近代〉には「内部にあるもの」「脳病」として捉えられた事実を考えるとき、これらは偶然ではないと思われる。「狐憑」と「木乃伊」は、単に同じ『歴史』に取材した作品だけではなく、「狐憑き」をめぐる言説といった核も示せるのである。本稿では、その指摘にとどめることとし、「木乃伊」における〈内部〉の問題に関しては紙面の都合上、次稿に譲りたい。

おわりに

中島敦の「狐憑」が、「狐憑」という題を持つのは、「狐憑き」の語句が持つ〈未開〉表象と、〈前近代〉における「狐憑き」が〈外部〉にあり「常態」へ「回復」する存在であったことがその理由であったと推測できる。また、〈近代〉において「狐憑き」が、〈外部〉から〈内部〉へと閉じ込められた歴史にも意識を向ける必要がある。そうした歴史を背景に、ヘロドトス『歴史』を題材にした「狐憑」と「木乃伊」は成立している。

中島は、「狐憑き」という認識、「狂気」という概念が、「人々」によって創り出される様を描いている。「これまでの感覚・知覚、そして認識の仕方を批判するうえで、格好のターゲットとして槍玉にあげられ」た「狐憑き」は、「人々」の急激な認識変化を象徴する存在である。そうしたとき、この作品の批評性は、中島敦が生きた戦時下の日本へも、また、作家としての中島が置かれた場所へも向けられるだろう。

注

① 佐々木充『中島敦の文学』（昭和四十八年六月十五日、桜楓社）

② 注①に同じ。また、野口武彦も「この作家の孤独な精神が生み出した世界最初の小説家の誕生についての、一つの個人的な伝説であった」とする。

③ 天野真美「戦時下の「古譚」――言葉と暴力」（「早稲田大学教育学部学術研究　国語・国文学編」第四十四巻、平成七年）など。

④ 宮田一生「中島敦「狐憑」論」（「日本文芸研究」第四十六巻第一号、平成六年六月）

⑤ 中務哲郎『ヘロドトス『歴史』世界の均衡を描く』（平成二十二年八

月二十五日、岩波書店）
⑥　田中萃一郎「希臘の二大史家」（「史学」第一巻第一号、大正十年十月）
⑦　近山金次「ヘロドトス著　青木巌訳　歴史（ヒストリアイ）上巻」（「史学」第十九巻第四号、昭和十五年十月）には、「歴史の父と言はれるヘロドトスの書はベルンハイムの所謂物語風の歴史であり、ニーチエの言葉を藉りて言へば記念碑的な歴史であるかもしれぬ」との文章がある。
⑧　新井通郎「中島敦「狐憑」の構造」（「三松　大学院紀要」第十八号、平成十六年三月）
⑨　永井順子「「狐憑き」の言説／「精神病者」の言説」（「科学研論集」第一巻、平成十五年一月）
⑩　川村邦光「脳病の神話――〝脳化〟社会の来歴――」（「日本文学」第四十五巻第十一号、平成八年十一月）
⑪　石井要「憑依する動物たち――中島敦「狐憑」論――」（「日本近代文学」第一〇一号、令和元年十一月）
⑫　昼田源四郎「狐憑きの心性史」（小松和彦編『憑きもの』所収、平成十二年六月九日、河出書房新社）
⑬　大原祐治「物語と右手――中島敦「狐憑」と死産される物語作者」（「千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書」、平成三十一年二月）
⑭　赤沢義人『新しい発明及び発見　第一巻』（大正十年十一月十九日、大明堂書店）
⑮　川村邦光「狐憑から「脳病」「神経病」へ」（小松和彦編『憑きもの』所収、平成十二年六月九日、河出書房新社）
⑯　伊藤慎吾「狐憑きと脳病」（『妖怪・憑依・擬人化の文化史』所収、平成二十八年二月十五日、笠間書院）
⑰　高橋紳吾『きつねつきの科学』（平成五年九月二十日、講談社）
⑱　諸岡知徳「「人々」の物語――中島敦「狐憑」論――」（「甲南国文」第五十二号、平成十七年三月）
⑲　注⑧に同じ。
⑳　増山守正『旧習一新』（一八九五年）。画像は国会図書館データベースより借用した。同様の指摘は川村邦光が『幻視する近代空間』（平成九年十月三十日、青弓社）でも行っている。
㉑　川村邦光「狐憑から「脳病」「神経病」へ」（小松和彦編『憑きもの』所収、平成十二年六月九日、河出書房新社）
㉒　川村邦光『憑依の近代とポリティクス』（平成十九年二月二十三日、青弓社）

〔付記〕　本稿は同志社大学（二〇一六年度）での講義の一部を元にした論文である。なお本稿で引用した中島敦の文章は、『中島敦全集』全三巻・別巻一（平成十三年十月十日～平成十四年五月二十日、筑摩書房）を底本とする。原則として旧漢字は新漢字に直し、ルビを簡略化した。